WINGSTONE JAPAN

INVEST IN MOMENTS

MimiIshio Edition



What legacy will you leave for the planet?

この世界に、何を残していくか？

One life. What will you leave behind?

It is a question of who we walk with, and how we choose to live.

With whom will you share your moments, and what meaning will you give them?

What is the life you truly want to lead?



一度きりの人生、命の時間。

人生は、「誰と、どう生きるか。」

限られた命の時間。

“ Invest in Moments.”

大切な人との一瞬一瞬を大事に、意義ある時間を生きる。



INDIA

インド共和国



Photo by Mimi Ishio & WorldBeing

14億の人口を抱えるインドは、モディ政権が推し進める「デジタル・インディア構想」のもと、デジタルインフラを武器にＧＤＰ上位のハイテク国家へと駆け上がっていった。

しかし、その華々しい躍進の裏で、貧困に縛り付けられた地域が存在する。首都デリーの東方に位置する国内最貧州の一つ、ビハール州だ。根強く残るカースト意識や、インフラ投資の遅れが資本流入を阻んできた。州内総生産（GSDP）に占める農業からの収益は約 20% と少ないにも関わらず、労働人口の７～８割が農業従事者だと言われている。

「女の子はどうせ結婚して家を出る。学校など行かずに、畑仕事を手伝わせた方がいい」

これが、この地域の貧困層の親たちの選択だ。

現地の教師たちは、これまで、そういった現状に介入する術を持たなかった。だが、

米国NGO『ワールドビーイング（Worldbeing)』の教育カリキュラムが、現場を変えつつある。



Photo by Mimi Ishio & WorldBeing

人生は自分で選んで、変えていけるんだ、と知った子どもたちが
「学ぶことは、未来を切り拓く武器である」と気づき始めたとき、その熱量は
教師たちの意識も変えていった。ある教員は、このように語ってくれた。

「今までは、波風を立てないようにやり過ごすのが精一杯でした。
しかし、ワールドビーイングの授業を通じて「NOと言える強さ」を子どもたちに教えるうちに、
私たち教師も　親たちに学校で学ぶ大切さを説得したり、学校に来てハラスメントをする男性たちを
追い払ったり、子どもたちの盾となってサポートできるようになりました。」





ビハール州の学校視察を終えたある日、寄付者の交流ディナーで私たちのテーブルに何度も足を運んでくれる一人の高校生がいた。彼女の名前はプリヤンカ。教師によると、以前はシャイで無口だったが「ワールドビーイング」の授業で主体性を持って生きることを学び、見違えるように明るくなった優秀卒業生なのだという。

「私もいつか、社会のための事業や寄付をして、他の子達のために役立ちたい。
　日本に行って、ビジネスを学びたい。」
「うん、いつ日本に来る？」
「お金のことを考えると……行けるのは、30年後かな」

彼女から返ってきたのは、グローバル経済の格差を象徴する回答だった。
プリヤンカの母親は、14歳で強制結婚をさせられ、彼女を出産したという。
少ないお金をやり繰りしながら一人で彼女を育てている。
スラムの極貧家庭においてパスポートの手数料や、国境を越える航空券の費用は、
この地域に住む人々の可処分所得を遥かに超越している。

「わかった。費用は出すから、今すぐ日本においで」


Photo by Mimi Ishio & WorldBeing

こうして、日本にプリヤンカがやってきた。
スラムから海外へ渡航する人間など、現地の自治体にとってもあまり前例がない中で
パスポートや航空券の手配、そして最大の難関である日本政府のビザ（査証）を
取得するための引受人保証―。いくつもの手続きを一つひとつクリアし、数ヶ月後、
プリヤンカとNGOワールドビーイングのメンバーはついに東京にやってきた。

官邸トップのご夫人をはじめ、約50名の心ある方々が集まる晩餐会で、プリヤンカは堂々と
経営者たちとの意見交換を楽しんでいた。翌日のランチ会で、彼女はこう語ってくれた。
「日本でたくさんのインスピレーションをもらいました。
　次は私が、他の 子どもたちに 光を与える側になりたい」
そこには、自らの意志で社会を変えていく「リーダー」の決意が見えた。

それから数年が経ったある日、インドにいるプリヤンカから連絡が入った。
『東京で夢を見つけて、今は地元のトップクラスの大学に通っている』とのこと。
ただ30年を待つはずだった少女が、自らの手で未来を手繰り寄せた。

経済格差、虐待、命の不平等。個人では太刀打ちできないように思える巨大な社会構造を
前にしたとき、個人の寄付や一企業による支援活動は、広大な砂漠に撒く一滴の水のように
思えるかもしれない。無力を感じる瞬間はいくつもある。
しかし「一羽の蝶の羽ばたきが、遠く離れた地で嵐を起こす」というバタフライエフェクトの
概念は、たしかに存在するのではないかと感じさせてくれた瞬間だった。


LOS ANGELS
ロサンゼルス



Photo by Mimi Ishio & samaritan's purse

1年の締めくくりを迎えるホリデーシーズン、１１月のロサンゼルス。

全米から集まった膨大な「善意」を世界中の子どもたちへと届ける、毎年恒例のプロジェクトがある。キリスト教系の国際支援団体「Samaritan’s Purse」が毎年開催しているこの活動では、世界中の貧困層の子どもたちにホリデーギフトを毎年1,000万〜1,200万箱以上届けている。

全米から寄せられる寄付品はおもちゃや文房具、衛生用品など多種多様だ。

手紙や家族写真が添えられているものも。それらを仕分け、一つひとつ心を込めて箱詰めしていく。







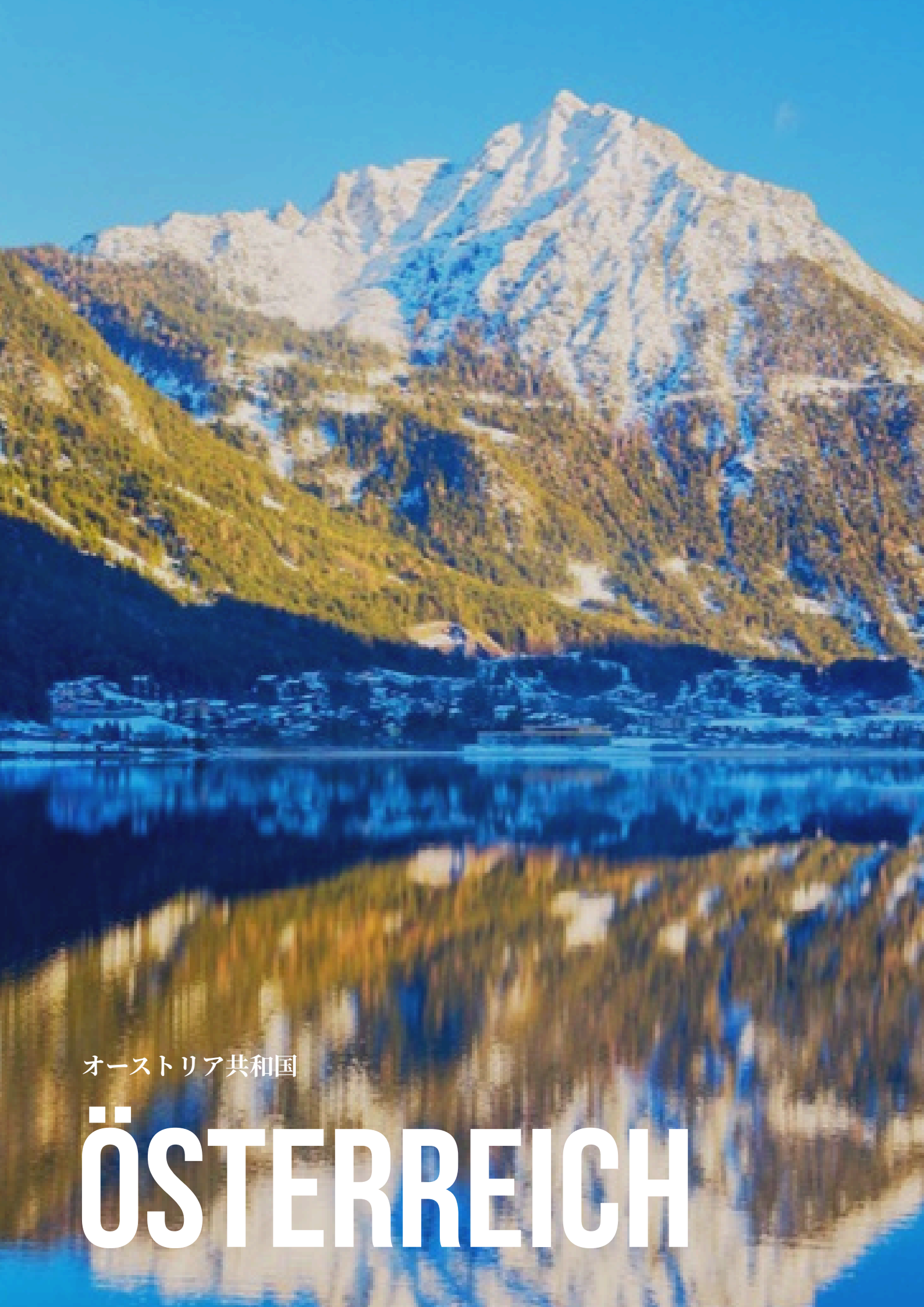


初年度は地域の小さな教会で、その次の年は巨大な配送センターで彼らに加わった。
場内に鳴り響くクリスマスソングやヒットソングに体を揺らし、笑顔で手を動かす人々。
そこには「助けてあげないと」という悲壮感や、義務感からくる硬さは一切ない。
「自分にできることがあるからここに来て、みんなで楽しんでいるだけ」

日本でもESGやDE&Iの文脈で、企業での社会貢献への関心が高まっている。しかし、どこか義務感や形だけのポーズにとどまり、持続的な熱量を生み出すことに苦戦している例も少なくない。Samaritan’s Purseの活動が多くの人々を惹きつけ、毎年莫大な数のギフトを送り出し続けられる理由は、「貢献することの楽しさ（Fun to Give）」が設計されている点にある。

- 音楽と熱気による空間演出
- 多様な人々が一体となれるシンプルな仕組み
- また参加したいと思えるような温かいコミュニティ

キリスト教圏に根づく「隣人を愛する」という精神を土台とし、自発的な善意を「楽しさ」というエンジンで駆動させる米国のフィランソロピー精神を感じる景色だった。



オーストリア共和国

ÖSTERREICH



Photo by Mimi Ishio

初夏の美しい緑が映えるヨーロッパの国 オーストリア。
伝説的な投資家や、ベンチャー・キャピタルの創設者など数百人が集まるフォーラムに、
２年連続で登壇者として招待いただいた。標高1,000メートルを超える山頂のシャレーで、
世界各地から集まった他の投資家たちと１週間、泊まり込みで議論が交わされた。

世界のデジタル資産市場は規制の明確化に伴いどう変化していくのか、大企業が単なるCVC出資にとどまらず、ESGや脱炭素を可視化するための技術に、いかに資本を直結させるか、などが議題に上がった。後半では、同じく登壇者として参加していた元ゴールキーパーのオリバー・カーン氏が、困難な環境にある子どもたちを支援する取り組みを共有した。

会食中、とあるヨーロッパ人の銀行役員から「娘が日本での就職を検討しているが、少し心配なんだ」と相談された。彼曰く『スピード感、狭い視野、情報格差、成長性、そして、日本のビジネス界では、女性は地位が低いのでは』という懸念。
「選ばれない国」は衰退する運命にある。
日本を「選ばれる国」にするかどうかは、これからの日本人の選択にかかっている。


NEW YORK
ニューヨーク


Photo by Mimi Ishio

二ューヨークの中枢、セントラルパークを望む会員制の場所、メトロポリタンクラブ。
19世紀末の創設以来、世界の政財界を動かすトップリーダーたちが集うこの歴史的空間で、海外の総理大臣を囲む、特別な会食に招待いただいた。
シークレットサービスが警護する中でも、和やかで愉しいディナーとなった。隣のイギリス紳士は天皇陛下とよくスポーツを共にしたという方で、世界経済についてのあらゆる数字が全て頭に入っている、研ぎ澄まされた知性をユーモアに包んで場を和ませる方であった。

話題は世界経済から哲学、歴史、「この世の中に、どのようなレガシーを残していくべきか」など様々。クローズドな場だからこそ共有できた価値観は、「未来の可能性に投資し、次の世代がより良い選択をできる土壌を遺すこと」ということである。
中でも、気候変動や海洋生態系の保護は、国家の存続をかけた戦略アジェンダである。

私たちは今、世界の転換点に立っている。
100年後の地球と社会が、私たちの遺した足跡をどう評価するかという、極めて倫理的な問いを再確認する場となった。




Photo by Mimi Ishio

環境問題について考えるとき、ふと娘の姿が思い浮かぶ。
彼女は小学生の時に、カナダのサマーキャンプで海の生き物をどう守るかについて
学んで以来、現在に至るまで環境保全に高い関心を持ち続けている。
日常的にプラスチックの利用を避けるだけでなく、かつてアメリカを訪れた際、
池に浮いているペットボトルを見るなり「魚が死んでしまう」と心配し、自ら片言の英語で
現地スタッフにゴミの回収をお願いしに行ったこともあった。
その姿を前にすると、大人こそがまず手本を示さなくてはと痛感する。
私の途上国や環境保全への取り組みは、命や自然を大事にする夫や娘の姿から学び、
ただ「大事な人の大事なものを守りたい」というシンプルな動機から始まった。

2014年から家族や当時の社員と共にチャリティをはじめて、のちにインパクト投資先や
国際フォーラムでのパネル登壇、海外首相との会食、議員の方々と勉強会を重ねる中で、
世界には解決されていない課題が多くあることを知った。投資家であり慈善家でもある知人からは、
人身売買の子どもたちをトラックから救出した時の胸が痛くなる話を聞いたりもした。
「すべての人や命が幸せであってほしい」と願えば願うほど、自分の無力さを感じることも多い。
だが、無力感に甘んじて立ち止まるのも違う。娘が池のゴミを見て迷わず行動を
起こしたように、私たち大人が見せるべきは、愛を持って未来に進む姿だろう。



マンハッタンで開催された 環境テック投資家サミット にパネル登壇者として参加した。
ウォール街で気候変動ファンドを動かす機関投資家、VC代表者、そして環境保護に取り組むシンガポールの財閥家と共にパネルディスカッションに招かれた。機関投資家は、ESG投資が世界の運用資産の3割を超えるというデータをもとにインセンティブを論じた。国際エネルギー機関（IEA）の発表によると、2024年のクリーンエネルギーへの世界投資額は約2兆ドルに達し、化石燃料への投資額（約1兆ドル）の2倍の規模へと成長を遂げている。
一方シンガポールの財閥当主が語ったのは、100年単位の「持続可能な資本のあり方」だ。
単なる四半期ごとのリターン（ROI）ではなく、世代を超えて地域資産を守るための「ディフェンシブかつ超長期的な資本投下」の必要性を伝えていた。
「投資とは、単に資産を増やすための数字のゲームではなく、私たちが未来の世代にどのような地球を残し、どのように『豊かな時間』を残していくかの表明だ。」
インパクト投資は忍耐が必要だが、私にとっては、同じ価値観を持つ「よい心の人たち」と人生の時間を過ごせることが何よりのインセンティブだ。出資先から集まる情報によって、株主やオーナーをしている他の会社との相乗効果を図ることもできる。
日本では個人のインパクト投資家が少ない印象だが、より確かな成果・結果と共にさらに普及することを期待したい。




スイス連邦
SWITZERLAND



Photo by Mimi Ishio

スイス・ダボスの冬は、世界の富と知性が最も濃密に凝縮される季節だ。
世界経済フォーラム（WEF）の年次総会が開催されるこの時期、人口わずか1万人強の
山あいの街は一変する。ホテルの宿泊費は通常の10倍、1泊数十万円から数百万円へと跳ね
上がり、街全体が巨大な国際交渉の場と化す。この圧倒的な価格設定自体が、最先端の
情報とネットワークにいかに巨額の経済的価値が認められているかの証左でもある。

この地で2025年、2026年と、AI投資や社会還元をテーマにした複数のサミットにパネル登壇者として
オファーいただき、世界のリーダーやイノベーターたちと対話をする機会に恵まれた。
その年によって、集う人々の傾向は異なるが、直近のサミットで強く感じたのは、
今、人々のパラダイムが明確に転換しつつあるという事実だ。

2026年の滞在時に特に印象深かったのは「資本をどのように世界への貢献につなげるか」と
いう問いに対する深い議論が主流を占めていたことだ。
率直に振り返れば、前年の全体的な論調はこれとは異なり、参加者同士のチャットなどでは
「いかに経済力を高めるか」といった資本主義のロジックが会話の中心を占めていたように思ったの
だ。当時、スイスで友人と会食を楽しむ私の手元に届く、支援先NGOからの報告書には、
貧困や虐待によって子どもや動物たちが今日も犠牲になっているという現実が綴られていて、
その埋めがたいギャップに、ずいぶん心が沈んだ。



Photo by Mimi Ishio

しかし、世界的な地政学リスクの緊迫化や、罪のない子どもたちが犠牲になる不条理な現実に直面し、今、世界の意識は変わった。

2026年のダボス滞在時には、同じ価値観と志を持つ世界トップクラスの知性が集い、世界をどう変革していくかについて、連日夜通しで本気の議論を交わす。出会う人、出会う人が社会への貢献を本気で考えていて、行動に移している。地球上の一地点で同じ価値観を持つ人たちが集い、「出会う運命だったんだね」と互いに縁を感じるような出会いの連続だった。

何かの大いなる力が、人々のベクトルの向きを一つに揃え始めたのだと確信した。

次なる社会的・経済的変革の流れは、すでに具体的な実践へと力強く動き出している。







社会の未来は、決して一人でつくられるものではない。

「未来のために何ができるか」を本気で考える人たちが、日本にも世界にも確かに増えた。

その光景に、大きな希望を感じている。

一度きりの人生において、命の時間を　何のために使うのか。

そして、誰とともに歩むのか。世界にはまだ解決すべき課題が数多くある。

それでも、同じ想いを持つ人たちと出会い、対話し、小さな行動を重ねていくことで、

未来は少しずつ動き出していく。

もし自分に、人のためにできることが少しでもあるならば、

「Why not?」――やらない理由はない。

関心の輪を広げ、次の世代へ希望を手渡していくことこそが、

今を生きる私たちにできる大切な一歩ではないかと思う。


TOKYO



テンプル大学 ジャパンキャンパスにて　米国元大統領のファミリーメンバーと共催で
「THE WING TOKYO 2025」カンファレンスが開かれ、メインスポンサーを務めた。

カンファレンスでは日本、米国、ブータンなどからゲストを迎えて「IKIGAI―新しい時代の
生きがいと働きがい」「経済的自立を促す金融リテラシー」「真の幸福論」などをテーマに
様々な議論が交わされた。テンプル大学の学生たちとの意見交換も行われた。

素晴らしい実行委員の皆さんが主体性を発揮して様々企画してくれ、この機会をきっかけに
何人かの方々が旗を上げてくれた。仲間と「海を守る会」をスタートした男性経営者や、
移住先のニューヨークで動物保護の取り組みを始めた会社員の方、いのちの大切さをテーマに描く
アーティスト、WEBメディア「Credo」でコラム執筆を始めてくれた人たちもいる。
海外進出を目指す経営者に向けて「交渉力」を伝えるプログラム「BBC」も始まった。
この「BBC」では人生における命の時間の使い方や事業、慈善活動を含むテーマで２日間に
渡り学べる研修で、「グローバル視点の持ち方だけでなく　人生に向き合える」と好評だ。
参加者の50代の経営者からは「今までの人生でずっと抱えていた課題が、この２日間で一気に
解決して涙が止まりませんでした」と報告をもらった。

「貴重な命の時間（や、最愛の夫との時間）を割くのであれば、意味のある時間に」と
考える私にとって、関わった方々からのそういった報告は何より嬉しい宝物だ。

日本の大学でも、最近、「インパクト投資」「グローバルな領域での社会還元」などのテーマで
登壇依頼をいただくようになり、若い世代を中心にこうしたテーマに関心が集まりつつあるのを
肌で感じている。



FAMILY

家族

Photo by Mimi Ishio



Photo by Mimi Ishio

人生の究極の目的とは何か。

一度きりの人生において、その答えは明快だ。

それは、「大切な人との時間を生きること」に他ならない。

かつての成功者たちは、死の間際に「愛する人との時間をもっと取ればよかった」という後悔の言葉を遺した。どれほどのイノベーションを起こし、莫大な富を築いたとしても、人間が最後に切望するのは、名声でも資産の数字でもなく、愛する人との時間である。

晩年になって、孤独で涙を流す「成功者」の姿を幾度か目にしてきた。

この真理に直面したとき、私は一つの決断を下した。

2018年、夫とともに、「家族最優先期間」に入ることを決めた。


Photo by Mimi Ishio

すべての家財道具をトランクルームへと預け、2018年、家族で旅に出た。
リゾートホテルを転々としながら気の向くままにあちこちを旅した。
自然に囲まれた場所で、海に沈む夕日を眺めながら、家族でボードゲームをして過ごす。
鳥が鳴く散歩道を、大好きな夫と一緒に歩いたり、読書に没頭する。
それは人生で最も豊かな時間の投資だった。

「こんなにパパと一緒に過ごしている小中学生は、なかなかいないんじゃないか」と
思うくらいに父親との時間を多く過ごしていた娘は、今では高校生になったが、
相変わらずパパと仲がいい。夫は子どもとの約束を必ず守り、いつも、
子どもとの時間を優先して向き合ってきた。

Invest in Moments. - 大切な人と過ごす「瞬間」に投資する。

時間の投資リターンは、複利となってのちの人生に生きてくる。



Photo by Mimi Ishio

海外の富裕層ファミリーたちとのカンファレンスでも「次世代への継承」テーマはよく話題に出てくる。家族間の継承においては、資産運用の教育をするのと同じくらい、あるいはそれ以上に大事なことがある。それは、「いかに生きるか」という姿勢を、大人が背中で伝えていくことであり、命や愛の大切さを親世代が示していくことだ。

家庭内で育まれた無条件の愛や信頼感は、子どもを通じて次の世代へと受け継がれていく。この「愛の循環」こそが、悲しい事件や虐待を防ぐ大きな役割となり、世界を良い方向へ動かしていく真の鍵であると確信している。だから、家庭での愛がとても大事だ。

しかし、一生懸命に教育しても　思う通りに育たないこともある。そもそも、子どもは、親の思う通りには成長しない。「生きてくれている」、ただそれだけで十分だ。
実子の代わりに、環境に恵まれない子どもたちにレガシーを残したっていい。

あなたの愛は、無駄にはならない。巡り巡って　次の世代に繋がっていく。

私たちが毎日無意識にしている　小さな選択の積み重ねが、未来を創る。

妻を大事にしなくて　「晩年孤独だ」、と言う人がいる。

「子どもとの時間を取らなくて後悔している」、と言う人もいる。

後で後悔しないように、今を大事にする。

例えば、スマホを触る時間を少し減らして、

大切な人の目を見て話す時間を選ぶこと。

夫や妻の話に耳を傾けること。

子どもとの時間をいっぱい楽しむこと。

子どもの頃にやりたかったことを、

思い出してやってみること。

「どうせ明日もある」ではなく、

「今」この瞬間を大切にすること。

その小さな選択が、あなたの人生を、

大切な人との思い出でいっぱいの、

豊かなものに変えてくれる。

大切にすべきことは目の前にちゃんとある。

大事な人との時間、今日も生きていること、

大切な人たちが生きていること、

おいしいご飯が食べれること

それらは、『当たり前』じゃなく、「幸せなこと。」

将来、振り返った時、「あの時、この選択をしてよかった」と

思えるような一日を、今日も生きよう。

命の時間。

大切な人との時間を大事に、一瞬一瞬を重ねて

今日も、素敵な一日を。



ART & PHILOSOPHY

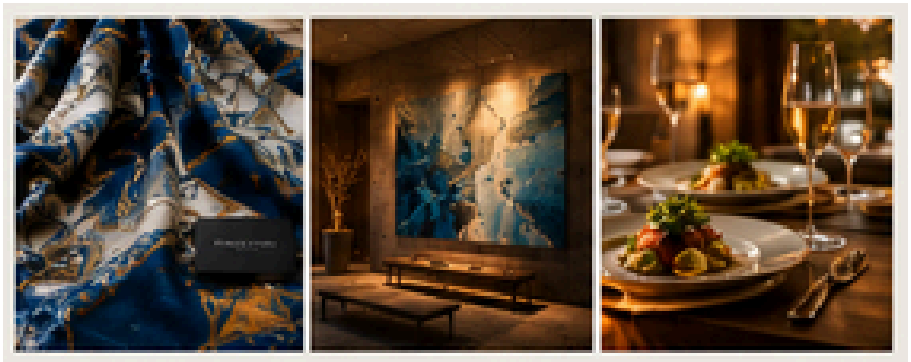
アート＆哲学について



人　生における本当の価値とは、単なる資産の蓄積ではなく、「誰と何をしたか？」だ。
同じ視座を持つ仲間と　どんなふうに人生の時間を重ねられたか。

価値観を共にする海外の友人たちとは、よくアートや哲学の話をする。
アートを所有することは、資産としての価値だけでなく、価値観を分かち合える仲間との
共通言語であり、つながりの証でもある。

慈善家、インパクト投資家など、国境を越えて集う聡明な友人たちとアートを囲み、
哲学や環境について夜通し語り合う時間は、特別に贅沢な愉しさをくれる。





Private Art Tour

ハワイ、パリ、ニューヨーク、ロサンゼルスで
プライベート・アート・ツアーへ。

成長、貢献、大切な人との時間・・・

私たちが大事にしていきたいのは、

アートを通じて生まれる　『瞬間』です。



旅先で交わされる対話やアイデアが、未来への種となる。

同じ価値観を共有する仲間と、心のままに

世界との対話を愉しむ旅に出よう







“Nothing is impossible, if you wish.”

あなたが望めば、何も不可能ではない。

Message from Mimi Ishio

自己紹介を兼ねたレポート記事を、最後までお読みくださりありがとう御座います。

日本・世界を見渡せば、痛ましい出来事も起こります。

しかし、素敵な方々となら、未来はきっと　よりよくできる。

幸いなことに、世界各国に、

賢く、思いやりがあり、人に手を差し伸べる心の豊かさがある

素敵な人たちがたくさんいます。

ともに　心を磨いて、器を大きくし、貢献の幅を広げる。

視野を広げる　視座を高める。

一人ひとり、それぞれが　影響力を高め

この世界を、より最高なものにしていく。

挑戦も、失敗も、やがて誰かの光となる。

世界は、広く、可能性に満ちています。

「Invest in Moments.」 一瞬一瞬を大切にし、

この世界での人生を、ワクワク楽しみながら。

ご一緒に生きていく皆様、

是非、これからもどうぞ宜しくお願い致します。

石尾美海



Invest in Moments.

一瞬一瞬を大切に生きる。

WINGSTONE JAPAN